

福島は絶対負けなし! 3・11反原発福島行動に700人

3月11日、開成山野外音楽堂（郡山市）で「3・11反原発福島行動'19」が開催されました。冷たい雨風のなかでしたが、県内・全国から集まった700名の参加者が「福島は絶対負けない!」と力強く宣言しました。

原発事故から8年、福島原発は終わっていません。小児甲状腺がんは200人をこえ、被曝はいまも続いています。「原発事故はなかったこと」になど絶対にできません。

原発廃炉作業は延期の連続でめどすらたっていない。除染でた行き場のない大量の汚染土を高速道路の拡幅に使おうとしています。避難指示解除にもかかわらず帰還した住民は2割もいません。そういうなかで、来年には聖火リレーを「ヴェイレッジ（第一原発から20キロ）から出発させ、福島市でオリンピック競技を開催しよう」としています。安倍首相が「原発事故はアンダーコントロール。健康被害はない」とウソをつけて招致した東京オリンピックのため、来年3月までにJR常磐線を全面開通させ、高線量の帰還困難区域へ住民を帰還させようとしています。「オリンピックは福島切り捨てだ」と多くの県民が感じています。

吉沢正巳さん（浪江町・希望の牧場代表）も集会で、まやかしの「復興五輪」を弾劾しました。「『復興オリンピックを福島から応援しよう』と内堀知事が言っているがとてそんな状態ではない。誰



のためのオリンピック、誰のための復興なんだ! 国と東京電力、ゼネコンが結託して裏金をもらい、浪江では漁港・堤防・市場と200億円も使って工事している。一方、浪江から5キロの海に第一原発の汚染水を流すと言っている。オリンピックに協力しようというキャンペーンは、安倍政権を応援しようという話じゃないですか! ふざけるんじゃない!」とのほととばしる怒りの訴えは、参加者を奮い立たせました。

労働者・農民・漁民が団結し、国際連帯の力で、原発の再稼働を絶対に許さず、原発も戦争もない社会をつくりましょう。

福島診療所建設委員会会計報告（17年10月～18年9月）

支出		収入	
人件費	840,000	前年度繰越金	19,230,095
交通費	1,583,345	基金・募金	17,069,430
通信費	1,035,871	借入金	200,000
会議費	15,274	預り金	3,000
印刷宣伝費	1,393,430	雑収入	3,955
交際費	34,548		
税理士報酬	210,600		
事務費	105,092		
診療所融資	16,600,000		
借入金返済	200,000		
預り金清算	3,000		
次年度繰越金	14,485,320		

SunRise No.19 2019年4月28日発行 福島診療所建設委員会

被曝と帰還の強制反対署名

65,127筆

(4月11日現在)

被曝帰還反対

検索

署名運動へのご協力をお願いします



福島診療所建設委員会

〒960-0662

福島県伊達市保原町柱田字平84 渡辺 馨

電話 070-5476-6162

WEB <http://www.clinic-fukushima.jp>

E-MAIL info@clinic-fukushima.jp

命と健康を守るためのあらゆる努力を

震災から8年目の3月10日、福島市において、「第3回 被爆・医療 福島シンポジウム 一事故より8年、福島の実現と課題一」が開催（同実行委員会主催）され、220人の参加で福島の子どもたち、福島県民の命と健康を守るために何ができるのか白熱的かつ真剣な議論が行われました。

「あれから8年、みなさんはどのようにお過ごしでいらっしゃいますか? 私には、甲状腺検査でB判定（経過観察中）の孫がおります」と自己紹介した中島千恵さんの司会あいさつで、シンポジウムは始まりました。

第一部は3人のシンポジストの方から問題提起を受けました。矢ヶ崎克馬先生（琉球大学名誉教授）は、ICRP（国際放射線防護委員会）の防護三原則が「低線量に見せかける恣意的操作、健康被害を極めて狭い範囲に閉じ込めることに腐心する非科学的な体系」であることを科学的に明らかにし、「住民の放射線防護が目的ではなく、核産業防護こそ目的がある」と指摘しました。

渡辺瑞也先生（小高赤坂病院院長）は、南相馬市小高区で被災してからの経験をふまえ、報道発表などのデータを分析したうえで「被曝の影響がゼロのはずはない」と断言されました。

益重先生（韓国・東国大学教授、韓国反核医師の会運営委員）からは、原発従事者に対する世界最大規模の長期にわたる観察に基づく研究結果が報告されました。30万人にもものばる原発労働者を30年ちかくにわたって追跡調査し、年平均被曝量は1.1ミリシーベルトと「低線量被曝」であったにもかかわらず、がん発症リスクは高線量被曝



と変わらなかったと結論づけられ、「低線量だから健康に影響がないなどとは言えない」と述べられました。

また IPPNW（核戦争防止国際医師会議）ドイツ支部のアレックス・ローゼン医師からのビデオメッセージでは、「選手や観客が被曝することを懸念し、東京オリンピック中止を求める国際キャンペーンを展開する」ことが訴えられました。

第二部は、参加者とシンポジストとの議論が行われました。県民健康調査検討委員会での甲状腺エコー検査の縮小化の動きへの不安と、それに対してどう行動していくべきかということなど、多くの参加者から意見があがりました。

金先生は「データ掌握の重要性」を力説され、渡辺先生は「福島県民は複雑な環境におかれ、なかなか声も上げられない。しかし、県民のマグマが噴き出す時は必ずくる。私たちには次の世代に継承していく義務がある」と決意を述べられました。

最後に、『ふくしま共同診療所と共にあゆむ会』の発足が報告され、命と健康を守るためにあらゆる努力を傾けようと確認し合いました。